



筑紫女学園大学リポジット

脱形容詞動詞の-en派生について : 音韻条件の有効性とその限界

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2014-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松崎, 徹, MATSUZAKI, Toru メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/111

脱形容詞動詞の *-en* 派生について

- 音韻条件の有効性とその限界

松 崎 徹

On the *-en* Derivation of Deadjectival Verbs
: questioning the validity of its phonological constraints

Toru MATSUZAKI

はじめに

任意の語の品詞が別の品詞へと変換されることはごく一般的にみられる言語現象である。英語においては、形容詞から動詞への品詞転換いわゆる脱形容詞動詞 (deadjectival verb) がこうした品詞変換の典型例と言ってもよいほど強い生産性を持っており、その変換の過程には (1) 元となる形容詞の語形を一切変えずにそのまま動詞として用いたもの (2) 接尾辞または接頭辞をつけて動詞化したもの、の 2 つの形式が認められる。前者の動詞群は特にゼロ派生 (zero derivation) とも呼ばれ、例としては *free*, *green*, *slow* などが挙げられ、後者の例としては、*-ize* (*formalize*, *modernize*, *normalize* 等)、*-ify* (*intensify*, *purify*, *simplify* 等)、*-en* (*moisten*, *ripen*, *sadden* 等) などで代表される語尾派生動詞、さらには接頭辞 *en-* が付加され動詞化したもの (*enable*, *enlarge*, *enrich* 等) などが挙げられる。

Jespersen (1939, 1942) を始めとして、Marchand (1968) や Spencer (1991) などの学者がこれまで脱形容詞動詞について論じてきているが、その主な関心は *-en* 語尾が付与され得るための音韻条件の確立に向けられている。本論でも取り上げる Jespersen (1939) や Katamba (1993) の音韻条件に代表されるように、こうした音韻条件はかなりの精度で *-en* 派生の可否を私たちに示しているのは事実である。しかしながら、脱形容詞動詞を広範囲に精査すると、こうした音韻条件では説明できない例外も少なからず存在することがわかってくる。

本論では、そうした *-en* 派生動詞に関する例外の存在を踏まえたうえで、脱形容詞動詞の変換形式に関しては、例えば *blocking* という音韻条件とは異なる言語現象によって変換の形式が決定されていたり、あるいは変換そのものが形容詞自体の持つ意味によって制約を受けていたり、音韻条件以外の要因を考慮に入れることの重要性を例証していくことにする。

英語における脱形容詞動詞の現状

現代英語における品詞変換の第一の特徴として、そうした変換に派生語尾を伴うことが指摘でき

る。例えば名詞 *symbol* が動詞へと品詞変換される場合には派生語尾 *-ize* を伴う。

(1) a. The cross is the *symbol* of Christianity.

b. The cross *symbolizes* Christianity.

名詞から動詞への品詞変換で次によく観察される現象は派生語尾を伴わない、いわゆるゼロ派生である。とりわけ名詞から動詞へ品詞変換される場合にこのゼロ派生の例が顕著である。

(2) a. Will you give me some *water*? / Did you *water* the plant?

b. Where did you hurt your *hand*? / *Hand* this paper in for me, please.

このように英語における任意の品詞の別な品詞への変換には語尾派生とゼロ派生という2種類の過程が認められるが、形容詞が動詞へ変換される場合にはゼロ派生よりも派生語尾を伴う頻度が高いのはまず注目される。以下は形容詞が動詞へ派生される場合の代表的な派生語尾とその用例である。

(3) *-ize*: We should *modernize* our computer lab system. (< modern)

The situation in the region has recently *normalized*. (< normal)

-ify: The typhoon *intensified* over night. (< intense)

It is better to *simplify* our argument. (< simple)

-en: He *moistened* his lips several times. (< moist)

The fruit seems to have *ripen* enough to taste sweet. (< ripe)

いずれの派生語尾も形態は異なるものの、使役的な (causative) 意味 'to make' もしくは起動的な (inchoative) 意味 'to become' を意味しているという点では一致が見られるところである。

このように、形容詞の動詞への変換には派生という言語現象が密接なかわりをが存在している一方、同様の品詞変換がゼロ派生でなされる形容詞も少数ではあるが存在している。たとえば、*slow* や *clean* は動詞として用いられる際にも語形変化を伴わない、いわゆるゼロ派生の例である。

(4) a. He made a *slow* start. / *Slow* down. You are driving too fast.

b. Please give me a *clean* handkerchief. / He *cleaned* our room.

以上のように大多数が派生の過程を経るなかで、なぜ一部の形容詞が動詞へと変換する際に派生を伴わずに転換されるのかは興味深い現象である。以下、本論では過去の研究も踏まえたうえで形容詞の動詞転換に焦点を当て、その発生の仕組みの解明を試みていくことにする。

-en 派生の音韻条件

前節で形容詞が動詞に変換される際には *-ize*、*-ify*、*-en* の3種の派生語尾があることを指摘したが、なかでも *-en* 派生はもう一方の派生形式であるゼロ派生との対比という観点から過去の研究でも論じられてきている。具体的には、形容詞が動詞に変換される際に *-en* 派生を経るか否かに関して、形容詞末尾の音韻的特徴を中心としてその決定要因がいくつか指摘されており、Jespersen (1939: 53-4) は *-en* 派生をしない形容詞を(1) 短母音もしくは2重母音で終わるもの(例 *free*, *low*, *narrow* 等)(2) 2音節のもの(例 *able*, *noble* 等)(3) 語尾音が [m] [n] [ŋ] [r] で終わるもの(例 *slim*, *thin*, *long*, *far* 等)と規定している。この Jespersen の条件は大部分の形容詞の *-en* 派生の可否を見極めるうえで有効であると言えるが、Siegel (1974: 174) が規定するように、上の(2)を「1音節語のみが *-en* 派生をする」と修正することで *separate* や *complete* などの3音節語を含む多音節語も *-en* 派生をしない(**separaten*, **completen*) ことが理由付けされ、より広範な形容詞にわたる規則の適用が可能となる。

しかしながら、形容詞全般をさらに精査すると、少なからぬ数の形容詞が *-en* 派生に関して Jespersen や Siegel の条件のうち音韻にかかわる部分に反していることに気づく。例えば *lax* と *apt* はどちらも上記のどの条件にも抵触はしないが *-en* 派生を受けない(**laxen*, **apten*)。こうした例を受けて、Katamba (1993: 74-5) は *-en* 派生の音韻条件として以下のようなより厳密なものを規定している。

...the base must end in an obstruent (i.e. stop, fricative or affricate), which may be optionally preceded by a sonorant (e.g. a nasal consonant or an approximate like /l/ or /r/).

これにより、先に挙げた *lax* [læks] と *apt* [æpt] が *-en* 派生を受けないのは、語尾の妨げ音 (obstruent) [s] と [t] それぞれに先行しているのが、鼻音 (nasal consonant)・近接音 (approximate) 以外の子音 [k] と [p] であるためである、と正当化される。

Katamba が *-en* 派生に関するより厳密化した条件を提唱して以降、この問題は一応の結論を見ているとの認識からか、筆者の知る限り特に新たな条件が追加されてはいないようである。しかしながら、現代英語には *-en* 派生に関して上述の音韻を中心とした一連の条件に従わない例が散見されるのは注意に値する事実である。以下、そうした例を概観し、音韻を中心とした条件だけでは *-en* 派生の可否を完全には推測することはできないことを検証していく。

-en 派生の音韻条件に基づく形容詞の分析

まず、前節に挙げた *-en* 派生に関する Katamba の音韻条件を再掲する。

...the base must end in an obstruent (i.e. stop, fricative or affricate), which may be optionally preceded

by a sonorant (e.g. a nasal consonant or an approximate like /l/ or /r/).

確かにこの条件に従えば Katamba も例としてあげている *damp* の *-en* 派生を正当化（語尾の *p* は閉鎖音でその前に鼻子音の *m* が来る）するものである一方、同様な音環境を持つ形容詞 *tart*（語尾の *t* は閉鎖音でその前に近接音の *r* が来る）や *faint*（語尾の *t* は閉鎖音でその前に鼻子音の *n* が来る）がいずれもゼロ派生動詞となる事実を説明はできない。¹

このような例を見ると、*-en* 派生の条件には抵触しないにもかかわらず、それが妨げられている類例が他にもどれほど存在するのが次なる関心となるであろう。そこで筆者は、単音節の形容詞を収集し、*-en* 派生の可否に関して調査してみた。以下、一つの試みとしてインターネット上(<http://www.momswhothink.com/reading/list-of-adjectives.html#Adjectives List>) に挙げられている1100以上におよぶ形容詞のリストの中から、まず単音節だけのものを抽出してみた。²

able bad big black blue brash brief bright broad brown calm cheap chief clean
clear cold cool cute damp dark dead dear deep drab drunk dry dull faint fair
false far fast fat few fine flat frail free fresh full glib good great green grey
hard harsh high hot huge ill keen kind large late lean left lewd light long
loose loud low lush male mean meek mere mute near neat new next nice
null odd old pale plain poor proud quaint quick quiet rare real red rich right
ripe round rude sad safe same sharp short shrill shy sick slim slow small
smart soft sore sour stale steep stiff strong swift tall tame tan tart tense thick
thin tight tough true vast warm weak wet white wide wild wise wrong wry
young

さらにこれらの形容詞群を Katamba の音韻条件に抵触していないもの80語へと絞り込み、それらを *-en* 派生の可否に基づいて一覧にしたのが下の表である。³

	<i>-en</i> 派生		<i>-en</i> 派生		<i>-en</i> 派生		<i>-en</i> 派生
bad	×	fresh	○	neat	○	soft	○
big	×	glib	×	nice	×	steep	○
black ⁴	○ / ×	good	×	odd	×	stiff	○
brash	×	great	○	old	×	strong	×
brief	×	hard	○	proud	×	swift	○
bright	○	harsh	○	quaint	×	tart	×
broad	○	hot	×	quick	○	tight	○
cheap	○	huge	×	quiet	○	tense	×

chief	×	kind	×	red	○	thick	○
cold	×	large	×	rich	×	tight	○
cute	×	late	×	right	×	tough	○
damp	○	left	×	ripe	○	vast	×
dark	○	lewd	×	round	×	weak	○
dead	○	light	○	rude	×	wet	×
deep	○	long	×	sad	○	white	○
drab	×	loose	○	safe	×	wide	○
faint	×	loud	×	sharp	○	wild	×
false	×	lush	×	short	○	wise	×
fat	○	meek	○	sick	○	wrong	×
flat	○	mute	×	smart	○	young	×

(○...-en 派生有り；×...-en 派生無し；○/×...-en 派生・ゼロ派生両方あり)

上の一覧を見てまず気がつくのは、Katamba の音韻条件に反していないにもかかわらず -en 派生をしない例が目立って多いことである。その中でも、形容詞 *hot* は同じ妨げ音 -t を語尾に持つその他の単音節形容詞の派生形式と比べてみると一層興味深い。すなわち、以下に挙げる形容詞 *fat*, *flat*, *short* の -en 派生は現代英語でもごく普通にその用例が見られる(用例は *Shogakukan Corpus Network* (SNC) より)。

fatten: There are salt tolerant shrubs that can feed and *fatten* camels.

flatten: ...taking a deep lungful of fresh air to fill his chest and *flatten* his stomach.

shorten: ...but if anyone can help *shorten* the process with the following queries , great.

こうした事実には照らし合わせても、*hot* から予想される派生動詞 **hotten* が存在しないのは特異な現象に思える。⁵

こうした事実はまず、音韻規則でのみ -en 派生の可否を決定することの限界を示唆しているものといえよう。後述するように、一覧の形容詞個々を精査すると、-en 派生の可否を決定するのに実際は音韻以外にもいくつかの言語学的要因が関わっていることがわかってくるのであるが、たとえば *wet* は様々な角度から分析しても -en 派生を伴う条件は全てそろっていると言えるのであるが実際はゼロ派生であるし、その理由について過去の研究で論じられたことも特にない。以下本論では、-en 派生の可否にかかわる音韻以外の条件を blocking の観点から論じていくことにする。

Blocking と -en 派生の関係

前節で挙げた -en 派生をしない形容詞について次の2つの視点からの更なる考察が必要であると

筆者は考える。まず、そもそも任意の形容詞に対応する動詞が *-en* 派生とは無関係で英語にすでに存在しており、その存在が新たな派生動詞の生成を拒んでいるという見方であり、これは一種の blocking (Aronoff 1976) とみなすことができるであろう。例えば、*cold* には派生動詞は存在しないが、語源的にもつながりがある動詞 *chill* (いずれもゲルマン基語の動詞語根 *kal-* ‘to be cold’ に由来) が存在しており、この動詞が新たな派生動詞 **colden* の生成を妨げている (block) と考えられる。また、先で触れた *hot* も呼応する動詞に *heat* の存在があり、*hot* から派生した動詞を語彙項目に改めて追加する必要性がないため **hotten* という語の生成はなされなかったという説明になる。それ以外で blocking が理由で *-en* 派生が妨げられていると考えられるものを上の表から抽出して以下に示す。

形容詞	動詞
bad	worsen
false	falsify
good	better
large	enlarge
long	elongate
proud	pride
rich	enrich
safe	save
strong	strengthen

上に挙げた 9 語の形容詞は、それぞれ独自の派生や形態の変化は見られるものの対応する動詞と語源的なつながりが認められ、こうした動詞の存在が *-en* 派生を妨げていると考えられる。⁶

さらに *-en* 派生をしない理由として考えられるのは、ゼロ派生形がもうすでに存在しており、それが *-en* 派生を逆に blocking しているというものである。以下、ゼロ派生による脱形容詞動詞を有する形容詞を示してみる。

brief faint glib mute odd old right round tart tense wet wild
wise wrong

これらの例は Katamba の条件どおりであれば *-en* 派生動詞を有するべきものであるなのでゼロ派生のみであるというのは改めて興味深く思われる。ただし、ゼロ派生形が *-en* 派生を blocking していると仮定した場合それをどのように証明できるかということが課題として残る。

それに対する答えの可能性として形容詞 *wet* を取り上げたい。史的観点から *wet* を検証してみると、まず OE 期に形容詞 (語形は *wæt*) として使用されていた本来語であり、意味も現代英語と同

様「湿った」である。さらにOE期ではこの *wæt* からの脱形容詞動詞として *wætan* も広く使用されており、注目すべきはこの動詞用法が現代英語に至るまで途切れることなく使用され続けていることである。すなわち、形容詞 *wet* が Katamba の音韻条件に従えば **wetten* という派生形を有するに値するのにもかかわらずそうならないのは、OE期から *wet* の主要な品詞のひとつとして使用されてきているゼロ派生動詞による blocking が大きく影響しているためであると筆者は考える。

ゼロ派生動詞の *wet* の影響の大きさを裏付けるものに形容詞 *deep* と *hard* がある。両者ともOE期に *wet* と同様形容詞に加えて動詞用法が存在していたが、ME期以降はそれぞれのゼロ派生による動詞の用例が極めて少なく、現代英語では廃用と見なされている。すなわち、ゼロ派生による blocking が緩んだことが、Katamba の音韻条件を満たす *deep* と *hard* に限って言えば、それぞれ *deepen*、*harden* という *-en* 派生が生まれる契機となったと考えられるのである。

脱形容詞動詞生成の意義

前節では形容詞で *-en* 動詞派生の条件が整っているにもかかわらず、その派生を伴わないものがある理由として、主に同語源の動詞の存在が派生を妨げる一種の blocking が起きていることを指摘したが、もうひとつここで考慮の必要があるのが、任意の形容詞に対応する動詞がそもそも存在する必要があるのかという問題がある。すなわち、任意の形容詞があればそれに対応する動詞も必ず存在するという前提の下でこれまでは議論がなされてきたが、ここで視点を変えて、例えば上で挙げた形容詞で *-en* 派生が見られない理由が、そもそもそれに対応する動詞形の存在の必要性がないことにあるのではないかと考えてみる。

そこで改めて *-en* 派生およびゼロ派生動詞もなく、また同語源の対応動詞もない形容詞を以下示してみる。

big brash chief cute drab huge kind late left lewd loud lush
quaint rude young

これらの形容詞に共通する特徴のひとつに、形容詞で表される概念を動詞化することへの必然性が見出しにくいという事実が指摘できるであろう。例えば *brash* は「でしゃばりな、生意気な」という意味であるが、これを動詞化して「でしゃばりにする(なる)」や「生意気にする(なる)」という役的もしくは起動的な表現を作り出したとしても、現実の言語活動において有用性があるものになるとは考え難い。ほかに、*chief* 「主要な」*left* 「左の」*lewd* 「みだらな、わいせつな」*quaint* 「風変わりで面白い」*rude* 「無礼な」なども仮にも動詞化した表現は自然な表現とは言えないであろう。

このような観点で対応する動詞の有無を論じた場合、それにそぐわない例もでてくるのは当然予想されるところで、*late* には *delay* (<OF *delayer*) *young* には *rejuvenate* (<*re* + *L juvenis*) などといった本来語の形容詞には対応動詞が借用語という関係も見られる。こういった形容詞・動詞のべ

アはむしろ先で考察したように blocking という観点から論じられるべきものであるかも知れないが、いずれにせ Katamba らの音韻を中心においた *-en* 派生条件のみでは説明しきれない数々の形容詞の存在は、この条件の根本からの見直しと、*-en* 派生動詞のより詳細な考察の必要性を如実に示しているといえるだろう。

おわりに

本論では、形容詞からの *-en* 派生動詞の生起について、語尾音を中心とした音韻環境がその成立を決定するという姿勢を Jespersen や Katamba が示しているのを受けて、筆者はひとつの試みとしてネット上に掲載されていた1100語以上におよぶ英語の形容詞リストの中から Katamba らの条件に関わる形容詞を抽出し、それらの動詞派生状況を調べた。その結果、そうした音韻環境を土台とした条件のみでは形容詞からの *-en* 派生を全て予測できるものではないことがわかった。むしろ、このような事実は脱形容詞動詞と *-en* 派生に関する問題を根本から検討しなおすことの有意義さを示していると言える。Jespersen がこの問題と取り組んだ際には歴史的観点から詳細な研究をおこなっているが、*-en* 派生動詞の中には古くは OE 期から由来するもの（例 OE *festnian* ‘fasten’）もあることを考慮すると、改めてこの問題に対するより綿密な史的再研究の必要性があることを最後に指摘しておきたい。

注

- 1 *fasten* (< *fast*) や *soften* (< *soft*) などは一見 Katamba の制約に抵触しているように思えるが、*-en* 派生に際してそれぞれ [t] と [f] が脱落することにより語尾子音が妨げ音だけとなり、結果として規則に従った派生が可能となっている。
- 2 形容詞との認識のうえインターネット上のリストには数詞および序数も含まれているが、形容詞と同等の扱いは適切ではないとの筆者の判断で考察の対象外とした。また *shut* や *hurt* といった動詞から転換した形容詞および *best* や *last* のような最上級またはそれに準ずるものも考察からは外した。さらに *like* や *plant* のように明らかに形容詞用法としては非常に特殊な語および *half* や *pink* のように名詞と併用される形容詞も対象外とした。
- 3 調査の基準は OED の記述に従った。*-en* 派生があると判断されるものには、現代英語で派生形が一般的でないもの（OED では *rare* や *archaic* と表記）も含んだ。以下のデータも同様の基準に基づくものとする。
- 4 Jespersen (1942 : 357) によると、ゼロ派生と *-en* 派生両者を持ち合わせる場合は通例意味・用法に差異が見られ、*blacken* と *black* のペアの場合は前者が *blacken a reputation* 「名声を汚す」のように比喩的な意味で用いられることが多いのに対し、後者は他動詞に用法が限られたうえで *black boots* のように文字通り「ブーツを黒塗りにする」という意味で用いられている。
- 5 OED によれば比喩的もしくは口語的な用法としてゼロ派生動詞の *hot* の存在が指摘されている。
- 6 ここで興味を引く例として *enlarge* と *enrich* を指摘できるであろう。両者とも通常の接尾辞派生でなく接頭辞派生 *en-* であるが、このような派生形が生じた背景にはフランス語の影響があり、OED の語源記述によれば、*enlarge* と *enrich* はともにフランス語の *enlarger*、*enrichir* を14世紀に借用したこ

とに由来する。ここで注目されるのは、この2語に加えて、フランス語からの借用されたその他の *en-* 動詞 (*ennoble* (< F *ennobler*), *ensure* (< AF *enseurer*) 等) からあらたに *en-* が接頭辞として抽出されたことであり、その結果として、以下に示す例が *en-* 派生動詞として英語内部で新たに生成されたものである。

enable < en + able
embitter < en + bitter
endear < en + dear

参考文献

- Anderson, Stephan. 1992. *A-Morphous Morphology*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Aronoff, M. 1976. *Word Formation in Generative Grammar*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Halle, M. 1973. "Prolegomena to a theory of word formation". *Linguistic Inquiry* 4:3-16.
- Jespersen, O. 1939. "The History of a Suffix". *Acta Linguistica* I, 48-56.
- Jespersen, O. 1942. *A Modern English Grammar: On Historical Principles. Part VI Morphology*. Copenhagen: Ejnar Munksgaard.
- Katamba, F. 1993. *Morphology*. New York: St. Martin's Press.
- Marchand, H. 1969. *The Categories and Types of Present-day English Word-Formation: A Synchronic-Diachronic Approach*. University, AL.: University of Alabama Press.
- Siegel, D. 1974. *Topics in English morphology*. Ph.D. thesis, MIT.
- Spencer, A. 1991. *Morphological Theory: An Introduction to Word Structure in Generative Grammar*. Oxford: Blackwell.

(まつざき とおる : 英語学科 准教授)